

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-4

「スマン、スマン、自分のことばかりで、とんだ野暮天をやってしまった」

辰巳は、さすがに愉悅の気持ちを希釈することを忘れなかったし、すかさず「とてもいいお話です」と真紀が言ってくれるので「ここの広東料理が絶品でね」と少しも銜うこともなく切り出せた。

「お任せします」

「せっかくの機会だし、帝国ホテル一辺倒の貴女の心変わりを期待して、チェックメイトといきたいところだが」

「まあ、おっしゃいますこと～。わかっていても中々……、困った性分です」

「その情っ張りなところも、魅力の一つなのだから。今夜は、差し詰め貴女がクィーンで私がビショップってところだろうね」

「僧正帽子がお似合いかもしれません」

「昔、フランス辺りでは司教などがワインやら薬用酒を造っていたからね。満更ミスマッチではないかもしれない」

辰巳と真紀は軽口をたたき合いながら、本館六階にある広東料理の店『桃花林』へと向かった。

1962年のホテル開業と同時にオープンした『桃花林』は、中国料理店としては業界の草分けで、2004年に“極上のチャイニーズ空間、をコンセプトに、フランス人デザイナー、エティエヌ・デクル氏に室内意匠を依頼、初秋にリニューアルを果たした。

「マネージャー、こちらはホテルと言えば、帝国しか眼中になくてね。なんとか寝返って頂けないものかと、真っ先にこちらへお連れしたのだから、よろしく頼むよ」

席に案内された辰巳は、棘のある口ぶりで伝えた。

「さようですか。帝国さんの『北京』は宮廷料理。私どもは広東料理でございますので、何とぞお手柔らかにお願い致します」とマネージャーが如才なく応対する。

「アイ・コンタクトで組まれては、勝ち目はありませんわ」

真紀は男ふたりの面持ちを可笑しがって、揶揄するように言った。

「かわいいヒトだ」

辰巳は唐突に言って、目じりを下げた。

「あら、耳慣れないお言葉。でも嬉しいわ。学生の時以来ですもの」

心底惚れた男と同じ言い回しをされた真紀は、動揺を押し隠すことに必死だった。

「ほう、その頃、会って見たかったね」と辰巳は言って目じりを下げた。